
最果ての理想論

鶴来絵凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果ての理想論

【Nコード】

N4279Z

【作者名】

鶴来絵風

【あらすじ】

最初は、ただこの日常が続いて行くのだと信じて疑わなかった。あのエロゲのように、あのギャルゲのように、ただこの日常パートをこなしていくはずだった。

それなのに

たった一つのキーワードが、たった一つの些細な行為が、「俺」と仁科 蓮を非日常パートへとシフトさせた

「黄金比」のキーワードの元、天使を背負う魂が理想を巡って疾走する。

「何故黄金比は誰も普遍的に美しいと感じるか知ってるか？」

「？」

「黄金比を越えたその先に、理想郷 イデア が存在しているからだ」

「厨二、乙ッ！！！」

命題0：起点のプロローグ（前書き）

ども、本当に久しぶりに「なろう」に来ました…
鶴来です。

いや〜……

久しぶり過ぎてパスワードを忘れるという失態…（爆）
まあなんとか、そんな試練（主に自業自得）を乗り越え、戻ってきましたw

未熟で至らないところが多いですが、暖かい目で見守っていただければ幸いです。

命題0：起点のプロローグ

……チュン……チュン

東向きの窓から差す春の朝日が、新しい日々が始まったことを教えてくれる。

そんな爽やかな朝を、俺は迎えた かった。

現実を言おう。

まず俺の部屋は西向きの窓しかない。

よってこの部屋、冬は猛烈に寒いし、夏は夕日がソーラービームを鮮やかに放ってくる。

まあしかし、今は4月。

そんな先々の苦しみを今嘆いても仕方ないだろう。

そしてさらなる現実を言うと

俺の目覚めは爽やかなんかじゃなかった。

というか、そもそも目覚めも何もない。

なにせ、寝ていないのだから。

目の前にはパソコン。

そこでは、まあアレだ。

18禁と呼ばれる種類に属するゲームのイベントが絶賛展開中だった。

因みに俺は16歳なのだが

まあ、俺はこの感動のストーリー見たさでプレイしているのであって、決して性的欲求を満たそうなどといった動機でプレイしているわけではないのだから別に良いんじゃないだろうか。うん、きつといいはずだ。

え？

その動機の割には部屋のティッシュのゴミが多いなって？

黙れ小僧！！

俺にだって色々あるんだよっ！！

16歳でエロゲやってナニが悪いというのだっ！！

いや、悪くない！！多分！！

と、

「1人でナニを開き直ってるんですか？」

というやや冷えた声。

ドアをゆっくりと開けながら入ってきたのは……何を隠そう、俺の幼なじみだった。

名前は長月 奏香。

丁寧な口調や佇まい、そして愛くるしさも含んだ綺麗な顔立ちで学校内でも人気が高い少女だ。

ただし、そのキャラは学校にいるときだけで、俺といるときはそれはそれは激しく俺に迫って

「ぐほおっ！？」

こんな調子で俺に竜巻旋風脚をたたき込んでくる。

「……俺が何したっていうんすか、そーかさん……」

「その様子を見てまたゲーム三昧で徹夜したのが察せられたからというのと、言い知れぬ嫌な感じがしたからです……」

ため息混じりにそう返されたが、言い知れぬ嫌な感じって……

どこのエスパーですか。

……というか待てよ。

「おい、そーか。お前どうやってここに入ってきたんだ？ 俺、鍵閉めてたはずだし、今は俺しか居ないはずだぞ？」

今、俺の父親は出張中だ。

母親は実家に帰ってるし（決して離婚前の修羅場でないことを親父の名誉のために記しておく）、それ以外に家族はいない。よって、そーかに鍵を開けることは出来なかった筈なのだが……。

「蓮君のお世話を頼まれていたので、この家のキー、予め蓮君のお母さんから預かってましたから。」

「なん……だと……ッ!？」

俺のK○y作品を預かった……!？

急いで俺は背後を振り返り、元は本棚、現エロゲ収納棚を確認した。「……全部揃ってるぞ。」

「何を驚いたのかは知りませんが、キーっていうのは、家のキーのことですよ!？」

「なんだ、ややこしい。」

「ややこしくしているのはどっちですか!?!」

「まさか俺だとも言うのかい？」

「あなた以外に誰がいるんですか!?!」

「……そーか。」

「今のは納得の『そーか』ですよね!？ 決して私の名前を言ったんじゃないよな？」

「まあ、落ち着けて。何もスカートの中身を見せ付けるくらい怒らなくてもいいじゃない。」

「!?!？」

顔を真っ赤に染め、慌ててスカートを押さえ込むそーか。

「嘘だハブア!？」

今度は全身をバネのようにして放ってきたアッパーを顎に食らう俺。

「変なところで嘘付かないでください!!」「…悪かったよ……。」
にしてもお前：最近俺を殴りすぎじゃないか？」

「自分が原因であることを自覚して下さいっ!!！」

「僕は悪くない。社会の根底がダメになってるせいなんだ」

「ニートみたいな発言はしないッ！」

「あーあ、働きたくないなあ…。」

「完全に言動がニートのそれになってますよ!？」

「ところでシンジ君。初号機に」

「そのゲンドウじゃありませんっ!!！」

そうやって、だらだらと高校生活最初の日が始まった。

命題1：理想論への離脱点

あの後、そーかにガミガミ言われつつ、無理矢理そーかを部屋の外に出しつつ、それでもなお部屋に侵入しようとするそーかに

「今から着替えるんだが、そんなに俺の裸が見たいのか」

と言って撃退しつつ、エロゲを片付けつつ、学校の制服に着替え終えた。

この間、およそ5分。

………せつかちなそーかのお陰か何なのか、最近手際がよくなって
いることに気付き、複雑な気分になる。

「ま、いいか…」

現在時刻は7時半。

これならゆっくりと歩いてても学校には余裕で間に合うだろう。

たとえ歩くのがとても遅いそーかを連れていても、だ。

以前もこんな風にそーかが奇襲を掛けてきたときがあったのだが、その時はそーかの足の遅さ、スタミナの無さのせいで新学期早々そろって遅刻という間抜けなことをしてかしたのだ。

さらに…俺自身はそんな気はさらさら無いのだが、どうもそーかは
疑心暗鬼なところが有るらしく…

俺が自分のことを置いていくのではないかと思っただらしく、通学中
ずっと腕にしがみ付かれたのだ。

結果「腕を組んで一緒に遅刻なんて…ヤツら、デキてるう」
と1週間も噂された。

そして俺の男友達は皆キレた。

ついでにいうとそいつらとは縁も切れた。

そんな感じで…そーかと登校する時は時間に余裕を持たないといけないことを学んだ俺は、朝食を食うのもそこそこ家に家を出た。

……にしても鍵と俺の世話を託された人が、結果的に俺の朝食時間を削ってるってのもなあ…
いかなもんでしょう？

学校に付くと、そこには既にチラホラと知った顔が見えた。
知った顔の殆どはこの隣でニコニコしているそーかのせいで縁を切った男ばかりなんだが…
まあ、それはいいとして。

「盛大だな…。」

そう思わず呟いてしまうほどに、入学式の会場は華美に飾り付けられていた。

「なんと言っても、ここの校訓は『何事も全力で』ですし、全力で歓迎してくれているのでしょねえ…。」

とそーかは言うが…

その校訓、どこぞの熱いテニスプレイヤーが叫んでそうだぞ…。

つーか校舎の壁にデカデカと吊されてる横断幕の中に

「もつと熱くなれよお!!」

って書いてあるのは完全に狙ってきてるよな。

校舎に入って教室を確認すると、幸か不幸かそーかと同じクラスだった。

「わあっ！！蓮君、おんなじクラスだよっ！！良かったね！！」
「あ…ああ……」

今、口では肯定しましたがそーかさん。

殺到する背後からの視線（主に男の）に殺されそうなので公共の場でそういう事言うの止めませんか？

遅刻したわけでも、腕を無理矢理組まれたわけでもないのに、入学早々敵を作っちゃってるんですけど…。

クラスに入った瞬間、俺は自分の人生の幕引きを感じざるを得なかった。

普通は幕開けの筈なのに。

概要を詳しく説明しよう。まずクラスの男のメンツが揃いも揃って俺と縁を切ったヤツらだった。

で、そーかと一緒に登校したのを知ったヤツらはことごとく（そーかに見えない場所で）嫌がらせをしてきた。

俺の席のイスにいつの間にか画ビヨウが仕掛けられていたり、カバンの中に消しカスの山を突っ込まれていたり、そもそもカバンもイスも無くなっていたりe t c e t c . . .

これが入学式1日で行われたと言うのだから驚きである。

団結力と機動力の恐ろしさを身を持って知ることになった。

その後もさらに、一日中何者か（恐らく男）による嫌がらせを執拗に受けた俺は、さらなる被害を防ぐべく一緒に帰ろうとするそーかを「用事があるから」と言っって何とか先に帰らせ、家路に付こうとしたのだが…

下駄箱から出した靴の中に画ビヨウ。

「……………はあ……………」

時間が経てば鎮火するもんなんだろうか、この炎上。マジで涙目である。

「全俺が涙したわ……………」

そんな絶望感を抱えつつ昇降口を出ようとしたその時だった。

「……………うん？」

一つ、妙なものを発見した。

当たり前だが、昇降口にはドアがある。

その内の一つのドアのガラスの部分が……………なんだろう、波打っているような感じになっているのだ。

意味が分からないかもしれないが、あたかも……………そのドアだけが、ガラスではなく水がはめ込まれているような……………

ガラス本来の固さは無く、触れれば液体同様に殆ど反作用も無くすり抜けてしまうような……………

そんな感じに見えた。

で、好奇心に駆られた俺はそのドアに近寄り、ガラスを確認するべく触れてみることにした。

(……………お?)

触れてみると、本当に液体みたいな感触だった。

いや、水のような抵抗すらない。

どちらかというと、シャボン玉の膜が張っているような感

「……………!? お!？」

……………抜けない。手が。

……………ある程度奥まで差し込んでしまった右手首から先が、全く抜けない。

「ない……………は……………!? 抜けねえぞ?!」グイグイ引っ張ってみても抜けない。

いや、それどころか

「ぬおおおうっ!? なっ…引っ張られて…る…!?!」

まるで窓の向こう側から引っ張られているかのように、俺の右腕がガラスに吸い込まれていく。

しかし、窓の向こう側で俺の手を引っ張る人は見えない。

それどころか、貫通しているはずの俺の右手すら見えない…!!
いよいよ俺の右腕全てが窓に吸収され、窓ガラスは肩にまで至っていた。

(どおいう…ことだよツ?)

窓ガラスは俺の腕が吸い込まれた場所を中心に、あたかもそこが水面であるかのように波紋を広げる。

そして肩が完全に窓に吸い込まれ、右耳が窓に吸い込まれたとき

『ふむう……全く、ここまで強情に拒まれたのは初めてじゃの……』

その声を聞いたのを最後に、俺の意識は飛んだ。

命題2：核精製者の逆鱗（とドヤ顔）

もしその光景を見た人がいたなら、驚き、恐怖の余り言葉を失っただろう。

そして、その光景を今まさに見た人がいた。

長月奏香。

他でもない、たった今全身を窓に吸収された少年の幼なじみである。

先に帰れとは言われたものの、やはり一人で帰ることは出来ず、ましてや少年以外の人間と一緒に帰る気はさらさら無かった。

ゆえにずっと校門で待っていたのだが見てしまった。

幼なじみの少年が、窓ガラスの奇怪な波紋へと消えていくのを。

しかし。

少女の瞳には驚愕も、恐怖も映ってはいなかった。

代わりにあったのは、絶望と自責の眼差し。

それが何を意味して、そして何を思っただけの瞳を潤ませているのか、それはまだこの少女以外知るよしの無いことである。

「……………うん…？」

朝起きると蜘蛛に変身していた、なんて話もあったなあ…と思いつつ、俺は目を開いた。

全身を見渡すが、どうも蜘蛛になっている箇所は無さそうだった。

念のため、本当に念のため、そう、決してノリノリではなく、むしろ嫌々、手首から蜘蛛の糸を出す某アメリカンヒーローのポーズを

取るが、変化無し。

「……………」
自分がバカらしくなった俺は、どうしようもなくとりあえず空を見上げた。

「……………いい天気だな…」

そう、本当にいい天気だった。

雲一つ無い空、灼熱のように降り注ぐ日光。

まさに常夏といった感じである。

足元に目を落とすと、綺麗な砂粒がサラサラと風に飛ばされていくのが見える。

その砂を目で追うと、実は足元だけでなく、そこかしこの地面が砂に覆われ、その砂の波がどこまでも続いているのに気付いた。

純粹な砂のみで作り出される緩やかな波や山。

そう、これはまさに……

「……さ、砂漠……………」

窓の液状化に続く超展開っぷりに、付いていけない俺がいた。

「と……とりあえず……………辺りの状況を確認……………」
するまでも無い。

自分で言っただが、砂しか無い場所でどうやって状況を確認しろと言っのか。

（液状化する窓ガラスに砂漠か……………これで時計が溶けたら完全にモネの世界だよなあ……………）

モネは世界的に有名な印象派の画家だ。

砂漠の中にドロドロに溶けた時計が転がっている絵などがよく知られているのだが……

「あ、明日美術だし絵の具忘れねえようにしないとなあ……………って、それよりこっからどう帰るかが先だろっ！……」

.....
.....
.....
沈黙。

「む.....虚しい。」

.....俺こと仁科 蓮、沈黙と虚しさで撃沈。

「っーかホント.....どう帰ればいいんだよおおっ!!!」

「教えてあげよっか？」

「ぬおお!？」

背後から唐突に声が聞こえ、驚いた俺はその場に尻餅をついた。
振り返った先にいたのは、一人の少女。

身長は...140くらいだろうか。

青っぽい髪の毛をショートに切り、ヘアバンドで止めていて、活発な印象を受ける。

さっき見渡した時はこんな女の子は居なかったはずなのだが.....。
しかし、単なる見落としてないことも明白だ。

何故なら...まずこの少女の存在感を見落とすことはあり得ない、そう思わせるほどにこの少女は可愛らしかったのだ。

そーかの、どちらかといえば「綺麗」や「お淑やか」に分類されるような「可愛らしさ」とはまた違った魅力を持つ少女が、そこにはいた。

「だッ.....誰だお前!？ つーかいつからそこにいたんだよ!？」

「え？ うーん.....アンタが某蜘蛛人間のヒーローのポーズをしていたあたりかしら。」

「最悪のタイミングじゃねーかつ!! つーかどこに隠れて」

「質問なら後で答えるから、今はちよつと黙ってて。 アイツに喰われたくないんなら、ね。」

直後。

俺の背後で爆音が轟いた。

「……………!?!」

「はん…ああやってそこらじゅう攻撃して、対象を炙り出す作戦って訳か…。」

…にしても、攻撃する場所が見当違いにも程があるわね。

ま、見たところESUで場所を特定する技みたいだし、仕方無いっちゃ仕方無いか。」

不敵に微笑む少女の隣で、情けなくも尻餅をついたままの俺。そして、爆発で飛び散った砂煙が薄れ始めたとき俺の目に映ったのは

「なんだよ……………あれは!?!」

薄れていく砂塵の中に浮かぶ一つの巨大な陰影。

そして、その真ん中には巨大な影と対を為すかのように小さく光る点が二つ。

そして その光る点が巨大な影の双眸であることに気付く程に砂塵が薄れ 遂にそいつの全貌が現れた。

化け物。

トンボのように透き通った羽。

体にはムカデのように大量の節が有り、その節の全てから 本来ならば節足のあるはずの場所から 触手が生えている。

グロテスクという言葉がしっくり来る容貌に加え、その目玉が人の目のように白目を持ってギョロギョロと動くのがさらにその異様さを増している。

「化け物……………」

「そう、化け物。それも人間が作り出した代物よ。言うなれば『恨みの本質』。」

「恨みの……………?」

「そ。まあ、詳しいことは後で話すから…今はアイツを潰さないからね。」

「潰すってどうやって…」

と訊こうとして少女の方を見ると、何やら妙なポーズをキメ始めた。

「『力で』に決まってるじゃない。」
そういうと、少女は右手を前に差し出して何かを掴むような動作を
し始め……

そして、俺は気付いた。

気付いてしまった。

ああ、俺は同じような光景を見たことがある、と。

だから俺はおもむろに立ち上がると、少女の両肩に手を優しく置い
た。

「……大体理解した。今の状況と、お前の言っていることも。」

「ふえ……っ!? な…何で…!? い、いきなり何を…?」

突然両肩を捕まれて驚いた少女はキメていたポーズを解き、茫然と
した様子でこちらを見上げてきた。

うむ、俺を見上げる程度の身長差からして、大体年齢的にもあつて
いる。

だから、俺は確信を持って話を続ける。

「わかるさ。コイツは誰もが皆通る道だしな。特に、この厳しい現
代を生き抜く為には。」

少女はハツとした顔になると、思い当たる節があるかのように俯い
た。

「だから自分に自信を持っていい。誰になんと言われようと、お前
は今のままでいいんだ。」

今度は俯いた顔を再び上げ、こちらを見ている。

この反応を見るかぎりどうやら、俺の思った通り、凶星らしい。

「結果や後悔は後ですればいい。今は、今のお前が決めるべきなん
だ。だから何をしようとお前は、お前だ。誰かがそれを否定するな
ら、その分だけ、いや、その何倍にだって、俺が肯定してやるよ。」

そう優しく語り掛けると、そして少女は膝から崩れ落ちた。
……どうやら、セラピーは成功したらしい。

厨二病の。

あのキメポーズは、かつて俺が厨二病を発病していたときにしていた変身ポーズと類似していた。

そしてさつきからしている若干高飛車な発言。

そして身長的に見て恐らく彼女は中学2、3年生だろう。

状況的に見て、彼女が厨二病発症者であることは明瞭だった。だから、俺はさらに続ける。

「厨二病は恥ずかしいことじゃない。だからもう泣くな。」

「……………はあ？」

怪訝な顔で見上げる少女。

そして、その顔が徐々に赤らんでいき、しまいには眉毛が逆八の字を描いた。

……………あれ？

やっぱダイレクトに厨二病って言うのはマズかったか？

「ああ、ごめん…やっぱ厨二って言葉には抵抗があるよな、ごめんごめ…んツ!？」

突然少女は崩れ落ちてしゃがんだ状態から飛び上がり、その勢いのまま俺の顎に頭突きを見舞って来た。

そ……そんなに厨二って言葉が嫌いだっただのか!？

「わ、悪かった!! 次からは別の表現を使うから…!!」

「…んかじゃない…」

「え？」

「私は厨二病なんかじゃなあああいッ!!!!!!」

突如少女がポケットから出したのは、人類の叡智を色々危険な方向

に集めた最新モデル　　かのアメリカでは民間で自由に取り扱える
ブツ
拳銃。

「なっ!?　ちよっ!!　物騒だからしまえっ!!　モデルガンでも改造してあると結構危険なんだぞ!？」

「……………これは…モノホンよおお!!!!」
少女の頭で、何かブツツとキレたような音がした。それと同時に、こちらに銃口を向け、引き金を引く少女。

渴いた破裂音とほぼ同時に、空気を切り裂く音が耳たぶのすぐ横を通り、そして俺の背後　　位置的には先程化け物がいた場所　　へと、銃口から放たれた亜音速の物体が飛んでいき……………

雷が落ちるような轟音が鳴り響いた。

「……………は……………?」

何がどうなったのか全く理解出来なかった俺は、先程放たれた銃弾の迎った先を見やると

巨大なクレーターが砂漠のど真ん中に形成され、そのクレーターの中央部分に先程の化け物が……………
見るも無惨なウエルダン仕立ての屍に変貌していた。

口を全開にしたまま言葉が出てこない俺。

そんな俺に、少女は勝ち誇ったように宣言してきた。

「私は笠音詩乃。こっちの世界においては『核精製の狙撃者』コア・スナイパー』の異名を持つ、れっきとした能力者よ。」

そう言って、銃口から未だ立ち上る煙をフツと一息吹いて「キマった……………!!」という表情をしている彼女　　笠音詩乃を見て、やは

り俺は思った。

ああ……診断どおりの厨二病だコイツ……

命題2：核精製者の逆鱗（とドヤ顔）（後書き）

これまでの登場人物

仁科 蓮^{ニシナレン}

主人公。エロゲーマーにして鈍感。

妙な方向で豊富な知識を持ち、事態に臨機応変に対応する能力を持つ。

だが、社会を生き抜く知恵とか良好な人間関係を築く能力は皆無で、その点においてはバカと言える。

^{ナガツキソウカ}

長月奏香

蓮の幼なじみ。

しっかり者で、常々暴走する蓮の世話係。

せっかちな性格の割にのんびりとしか行動出来ないというジレンマを抱えているため、ドジをすることもしばしば。

しっかり者のドジっ子。

蓮からは「ソーか」と呼ばれている。

野郎ども

蓮と奏香のクラスメートで、奏香のファンクラブ会員メンバー。

奏香と行動を共にする蓮を敵として認識しており、学校全体を対蓮用ブービートラップ要塞にする計画を立案中。

^{カサネシノ}

笠音詩乃

異名は「核精製の狙撃者」コア・スナイパー<

五大元素の核を精製する能力を持つ……らしい。

それを弾丸の形に変えて拳銃に装填・発射して爆発的な攻撃を敵に

「えられる…らしい。」

蓮曰く「末期厨二病患者」

設定がきちんと書いてない中で超展開がずっと続いてますが、次の命題3で説明するのではしお待ちを！！

(命題3に続く)

命題3：超感覚的眞実在

かつて、古代ギリシヤにおいて斬新な思想を持った哲學家がいた。彼はこう主張した。

「私達は普段、ある物質の本質の影しか見ていない。すなわち、この世に存在するあらゆる物質は、ある完全なる世界に存在する本質の贗作であり、同質にして否なるものである。」

そして
「その完全なる世界こそ『イデア』という理想郷、全ての美があり、我々が感じ取る感覚の本質が存在するのだ」と。

これがかの「イデア論」の起りである。

当時は誰もがその存在を否定したイデア。

しかしもし、それが本当にあったとしたら…？

その未開の理想郷に到達した者がいたとしたら…？

そしてその世界の本質を変えたとしたら…？

全ての形相が集う場所、イデア。

そこには全てがあつて、何も無い。

「イデア？」

俺はその呼称を復唱した。

「そう、イデア。私達はココをそう読んでいるわ。」

ここは砂漠の真つただ中。

あの後。

目の前で、拳銃一丁であの化け物をハードなウエルダンにした少女、笠音詩乃が俺に「案内したい場所がある」と言って来た。

そのため、行くあても無い俺は仕方無しに付いていくことにしたのだ。

「アイデアねえ……。お前の命名か？」

「違うわ。私だったらもつとカツコいい名前を付けるもの。例えば『ミオーワールド』とか『精神と』の『』とか」

一部風で聞こえにくくなったの仕様であって決して編集されたわけではない……はずだ。

「どっちももろパクリの上厨二じゃねーかつ！　ならアイデアの方がまだマシ」

と。

チャキツという金属音の後、拳銃を俺に向けて構える笠音。

「……なんか言った？」

笑顔なのが逆に怖い。

「……何でもないっす」

防御するすべも無い俺はホールドアップする。

「わかればよろしい。で、このアイデアについてなんだけど……。」

笠音が言うには

ここはアイデアと言う世界で、俺たちが普段すんでいる世界とは別の独立した世界らしい。

ここには俺たちが普段すむ世界に存在するあらゆる物質、思想、概念、そして感情に至るまでの全ての「本質」が存在しているらしい。先程の化け物は人間の「恨み」や「憎しみ」のような負の感情の本質が具現化されたもの、ということだ。

因みにこの感情の本質は消しても消しても消した分だけ溢れてくる上、負の感情の本質は手当たり次第辺りを攻撃してくるため情け容赦無く潰してよいとのこと。

そして話を戻すと、この世界においてその本質を塗り替えたり、破壊したりすれば俺たちのすむ世界の物質を思うように変質させることが出来るのだという。

「そんな便利な世界なのか？」

「ええ。ただし……アイデアの持つ力　本質を変えろという力を使うには、アイデアに存在する思念体　つまり私達ね　の意志を統一する必要があるの。」

「意志を統一？」

「そう。例えば、『ラーメンを食べたい』と願っても、他の誰かが『ああ、カツ丼食いて〜』って願ってしまうと、どちらの願いも相殺されてしまう……そういう性質がアイデアにはあるらしいの。だからアイデアに存在する全ての人に協力を仰いで意志を統一する必要がある。」

「意志を統一、ねえ……」

さっぱりわからん。

とりあえず唯一わかったことといえば……

「お前、腹へってるのか？」

やたらと食い物の例えばかりしてるけど。」

「なっ!?!?　ち、違っわよ!?!?!」

するど。

ぐぎゅるるるる……

見事なタイミングで笠音の腹の虫が鳴いた。

「~~~~ッ!?!?!うっ……うっ……。」

余りに恥ずかしかつたのだろう、耳たぶまで真っ赤になっている。

分かりやすいヤツだな……「とっ……とにかく！！アイデアっていうのはそういう物なの！！だから今アイデアに存在する全ての人を集めて、互いに協力すればアイデア本来の力を行使できる！！」

「……よくわからんけど、俺をそれに協力させるためにここまで連れてきたわけか？」

「そだよ。……今更だけど、協力しないなんて言わないでしょうね？」

半ば無理やり連れてきておいて、協力しろって……んな無茶苦茶な。

しかし、協力する以外に選択肢も無い。

「そいつに協力すれば帰る方法を教えてくれるんだな？」

「ええ……。今は無理だけど。」

向こうの世界へのゲートには開くタイミングがある。だから開くタイミングを教えてあげることくらいなら出来るわ。」

「……っ！か、さっきの話からすれば、俺がさっさと帰っちまうのが得策なんじゃないのか？」

「……取引材料だから詳しくは言えないけど、次のゲートが開く時間は……1週間後よ。それまでは帰れない。」

「なっ……！？」

今日は4月1日だから……俺の春休みと始業から三日間が全てぶっ飛ばぞ！？」

「ああ、大丈夫。帰ったときの時間は、ここに来たときの時間からものの1分くらいしかたつてないから。」

「都合いい……」

「そもそもこのアイデアは時間軸の「本質」すら存在する完全な世界よ？ 私達の住む世界と同じように時間が流れている方が不自然じゃない。」

「ま……まあ、確かに……」

「……さて、一通り説明し終わったところで。」

そこで一旦話を区切ると、笠音は足を止めた。「ここが私達のこの世界における住みかにして本拠地。エレメント・キャンプよ。」

「……なんでも名前を付けりゃいいってもんでも無いと思うんだけどな……」

エレメント・キャンプか…

なんつーか……もう厨二すぎて何も言えねえな…

多分某掲示板のスレだと

「EWレWメWンWトW W W」

とか

「ダメだコイツ、もう手遅れだお(爆)」

とか書かれるんじゃないか…?

砂漠の中でWの藁が大量に茂っているっていう…

「ぼけーっとしてないで早く来なさいよ!!」

「!!! お、おう!!!」

いかんいかん。このままだと、いつ笠音詩乃の厨二に対して「厨二乙WWW」とスレを回すか知れたもんじゃない。

さっきはセラピーとはいえ「否定しない」って言っちゃったしな。

それに間違えて口を滑らせれば先程の銃口が俺目がけて火を吹くことは自明の理だ。

気を付けないと、な…。

生きて帰るためにも。

命題3：超感覚的眞実在（後書き）

超 展 開（キラッ

……な命題3でしたっ（汗

設定厨丸出しな内容でしたが、理解できましたでしょうか……？
恐らく蓮と同様に

「ふむふむ、さっぱりわからん」

って人も多いでしょうね……OTL

自分の中で作られた設定を説明するのがこれほど難しいとは……

分からない点がありましたら、遠慮なく言ってください。

そのたびに改良していくつもりです（；^ー^A

で、今回はアイデアに関する説明だけでしたが、命題4では詩乃が以前呟いていたESUと、彼女曰く「能力」についての設定に触れていこうと思います。

では、また会いましょう！！

命題4：頭脳回路の謀報士（前書き）

予め謝っておきます…

すみません…命題3で

「命題4では能力について説明しまーす」

なんて言っていました、話の長さ上、命題5になりそうです……（汗）

本当にすみませんッ！！

と、とりあえずメタなネタが大量に放出されてる命題4をお楽しみ下さい！！

命題4：頭脳回路の諜報士

エレメント・キャンプ。

詩乃命名の厨二じみた名前のこの基地は、何故か砂漠の中でぽつんと建つ十数塔のビルで形成されていた。

「……なんでこんな砂漠にビルが……？」

「行ったでしょ？ イデアでは存在する人の意志によって世界が変わる。ここに居るのは私が集めた人達で……みんな都会に住んでいる人なの。だから自然と、住む場所は『都会』というイメージを持つ。その結果、都会のイメージを持つ人々が集まったためにこの周辺だけが『都会』の本質を具現化させているの。」

「つまり、逆に田舎出身者が多ければ『田舎』に設定される、ってことか？」

「そういう事。もしオタクが集まっていたらゲーオーズやア○メイトが形成されてたでしょうね。」

「……さいですか。」

相変わらず例えが偏っている笠音だった。

「ま……そんなことは置いといて……こつちよ。」

笠音は、数あるビルの中でも最も背の低くて奥にあるものの中へ入って行く。

「なんでコレなんだ？ 他にも日当たりとかが良さそうなビルが山ほどあるのに。」

ロビーを抜けて、階段へと歩いていく。

「あのねえ……、砂漠の真ん中で日当たりがいいってことが何を表しているかくらい考えなさいよ……」。このビルは一番背が低いし、奥にあるから日が当たらずにちょうどいい気温なの。」

「……なるほど。」

雑談をしているうちに3階まで来た。

笠音はその階の中でも一番大きなドアのあるルームに向かっていく。

「……着いたわ。ここが私達が主に過ごしている部屋、『ザ・ディスカッションルーム』　　大会議室よ。」
「そのまんまか!！」

何故英語にしたし。

大会議室……笠音曰く「ザ・ディスカッションルーム」に入ると、そこには幾人かの人影があった。

「今戻ったわ。」

「…遅かったな。いつもより3分程遅れている。…それに脳波に若干乱れがあるな。おおよそ、そのお前の後ろでコソコソしている奴に肩でも触られて色々となにかをされブツ………」

「今日もせつせと頭脳諜報ですかはいはい調子いいですねえ!？」

ただ調子がいいのはさておき、調子には乗るなツつたわよねえ?

勝手に人の頭ん中覗くなって言い聞かせるわよねえ!？」

「ふあい………」

解説しよう。

突然饒舌に喋りだした男が奇妙な声と共に黙ったのは笠音が拳銃でその頬を殴ったからだ。

その男をよく観察すると……このビルの日照権はまるで無視されているために暗くて見づらいが、メガネのうりざね顔だった。

目は細めで、知的な感じがする……さっきの発言さえなければ。

で、その男の口には笠音の拳銃が突っ込まれており、半ギレの笠音に色々と脅されてるっばかった。

「おーい……俺達のことは無視かよ?」

俺同様、そんな光景に付いていけないヤツがいたらしく、部屋の

奥から笠音に声をかけ

「ッ!?」

「なっ?!」

そいつと俺はほぼ同時に声を上げた。

「竹田!?!」

「仁科じゃねえか!?!」

竹田。

現在、俺のクラスメイトにして、俺の幼なじみの長月奏香の非公式ファンクラブ会員。

即ち。

かつては俺がよく遊んでいた悪友であり、今はファンクラブ構成員として俺を襲撃してくる危険な存在だ。

しかし、それだけじゃなかった。

…竹田だけじゃ無かったのだ。

「何!?! 仁科だとお?!」

声変わりが終わってない、というか始まってすらいないであろう甲高い声で出てきたのは、やはりファンクラブ構成員の田中。

「っーこたあ、笠音サマの肩を掴んだのも……仁科、貴様のことがあ!?!」

と、さっきのメガネ男から得た情報を冷静に整理しつつ灼熱のごとく糾弾してくるのは、これまたファンクラブ構成員の北川。

っーか笠音サマって……

「おのれえ……俺達のアイドル、長月ちゃんとイチヤイチャしてると思えば、こんなところでも……!! それも笠音サマとお……!!」

最後に出て来たのは嫉妬で般若のような顔になってる橋岡。

……ヤバイ。

どうやらここはさっきの砂漠より危険だぞ……!!

「つか笠音に撃ち殺されないように選択肢を選んできたのに、どの道ここでデッドエンドじゃねえか……!!」

「……こういうときはなんて言えばいいんだ？」

「ほらっ!! 数多のエロゲをこなしてきた俺じゃないか!! なにかあるはずだろ、俺……!!」

「……よし、ここは毅然と、冷静且つ不敵な態度で臨めば、きっとあいつらも落ち着くはず……!!」

「ふっ……たわいもない」

「ぎゃあああああす……!!」

「確かに冷静で不敵だけと思いきり死亡フラグじゃねえかああ!!……!!」

「案の定、竹田達が喚きだした。」

「なあにが『たわいもない』だよ……!!」

と竹田。

「ごまかそうだったってそうはいかねえぞ……!!」

と田中。

「誰の許しを得てその顔を上げる……!!」

と北川。

「そうだそうだ……!!」

と橋岡。

「それみたことか……!!」

「最悪だ……くそっ……!!」

「やっぱりこのセリフは聖杯戦争外でも死亡フラグなのか……!!」

「つか北川。まさかお前もf O t e見てるとは思わなかった。」

「にしても……どうする。」

「状況はさっきより悪化しちまったし、かといって外に出たら、また

あのグロテスクな化け物が出てくるかもしれない。
絶体絶命。

……いや、これは逆に「もう失うものが何もない」と取れば、きつと打開できる策が見つかるはずだ。

いわゆる逆転の発想とかコペルニクスの発想とか呼ばれている奴だ。そう、今の俺に失うものは何もない！！

そう、もう何も怖く………こ……怖く………

やっぱ死亡フラグじゃねえかああああ！！！！！！！！

畜生！！ 出来ることなら過去に戻って窓に手を突っ込む俺を止めたい！！

それは 世界線への入り口だ！！つて知らせたい！！
いや………時間を止める能力でもいい！！

今すぐここから逃げ出して安全な場所に付くまでの時間が欲しい！！
時間よ止まれ！！

すると、先程のメガネの男がこちらをすつと見やったかと思うと、
つつかかと歩いてきた。

た、助けてくれるのか！？と期待したが、この期待は一瞬で崩れ去る。

何故なら、メガネはこう、俺に言ってきたからだ。

「あれー？ まゆしいの時計止まってる」

「究極の死亡フラグじゃねえかああああ！！！！！！ 全世界線を通じて俺を殺す気かああ！！！！」

「いや………時間を止めたいだとか思考していたようだから、つい、

な……」

「『つい』じゃねーだろっ！！俺の身にもなってみろっ………
………て………」

そこで、俺ははたと気付いた。

………何でこいつ、俺が考えてたことを、知っている　？すると、
メガネの背後で大袈裟にため息をつく奴がいた。

笠音だ。

「ノゾキ、さつき私が言ったこともう忘れたわけ？　また拳銃を口
に突っ込まれたいの？」

どうやら、今のセリフは俺ではなくてノゾキと呼ばれたメガネに向
かってい言われたらしい。

「む………済まない。いや何、つい能力が滑ってな………」

能力が滑る。

日本語でok？

ぼかんとしている俺を見て、メガネ　ノゾキは言った。

「自己紹介が遅れたな。俺は野溝智揮。人からは略してノゾキ

あるいは『頭脳回路の謀報士>ブレイン・ハッカー<』と呼ばれて
いる。趣味は自身の能力で他人の思考をハッキングすること、そ
れで人をいじる事だ。」

なんつー趣味だ。

「好きな食い物は　あえて言うなら他人の不幸」

「不幸!？」

「他人の不幸を見ると飯が旨い。」

「いい趣味してんなあアンタ!!!」

………ダメだ………

この場所、まともな奴が一人もいねえ……!!!

エロゲーマーの俺でさえ霞むような強烈な奴しかいねえ……。
……俺、ここで1週間も過ごす自信ねえよ……。

命題4：頭脳回路の諜報士（後書き）

今回出てきたキャラ達

竹田、田中、北川、橋岡

「長月奏香を愛する会」の構成員。
もちろん非リア充である。

竹田は陸上部で足が速く、田中は情報部でパソコンなどの機械をいじるのが得意。

北川は柔道部に所属しており、ガタイがでかく、背も高い。無論力持ち。

橋岡は野球部の幽霊部員。それ以外に特筆すべき特徴無し。

ノゾキ

（野溝智揮「ノミゾトモキ」）

相手の思考を読み取る能力を持つ。

そして読み取った思考に対応した行動をとることで相手を翻弄させるのが大得意であり、本人はそれを至極楽しんでいる。

「頭脳回路の諜報士」>ブレインハッカー<の異名を持つ。

無論この異名の命名は笠音である。

命題5：精髓機構起動力 E S U

状況を整理しておこう。

現在、この部屋 ザ・ディスカッションルームにいるのは…

厨二病、笠音詩乃

メガネ男、ノゾキ

危険因子、竹田

同上、田中

同上、北川

同上、橋岡

そして俺、の計7人だ。

各々自己紹介を終え、話を聞くに、竹田達は俺と同様に昇降口のドアの窓からここに迷い込んだらしい。

そしてそこを丁度通り掛かったノゾキに助けられ、ここに連れてこられたとか。

そして、ノゾキと笠音はよくこの世界に来る常連(?)。

まあ、さっきの口振りと落ち着きっぷりからしてそれはわかるとして……

「竹田、お前、結構落ち着いてんな……」

「へ？ まあ、来ちまったもんはしょうがないしな。

それに目下の第一目標はお前の殲滅だし。」

「その目標は勘弁してくれませんかねえ!？」

「いーぞー、もっとやれやれー」

そうやってはやしたてるのは……案の定ノゾキだ。

「ちょ、助長すんな!!」

「人の不幸はアイスクリームに砂糖とホイップクリームと蜂蜜をたっぷりかけて、さらにその上からジャムを」

「甘いつて言いたいのはよおく分かったから、お前は黙ってる!!」

「黙ってもいいのか？ これからこの世界について、説明をしようと思ったのだが……」

「……う。」

「じゃあ、喋っても構わないな。」

「あ……ああ……」

くそっ……ここはあくまで俺にとっては超アウエーだ。

逆に、コイツ ノゾキにとってはホーム同然だし、話をコイツにあわせなくちゃならないのは色々と不安だが、仕方ない。

「そうだな……じゃあまずは……小さな星の、話をしよう……」

「待てマテ待て！！ 何故突然歌いだした！？ それも何故に仮面

ライダーファイズ！？」

「特に、意味はない。」

「じゃあするなよ！！」

「全く……何でもツツコミをすれば面白くなると思っているのか？

そんなにツツコミばかりしていると友達無くすぞ」

「誰のせいだよ！！ つーか後半の台詞はどんな論理展開をしたら出てくるんだよ！？」

「またツツコミか。本当に学習しないな。」

イラッ。

なんだコイツ。

滅茶苦茶な言われように、流石に腹が立ってきた。

「脳波を見るかぎり、現在キミは怒りに満ちている、と……」

「脳波を見なくても表情から分かるだろ……」

と、この馬鹿げた会話に介入して、話の流れを止めてくれたのは意外な事に竹田だった。

竹田……お前、まさか助けてくれたのか……？

お前、実は良い奴……

「さっさとそつちの話を終わらせてくれね？ こっちはこっちで色々話すがたんまりと有るんだからな……」

前言撤回。

やっぱ危険だわ、お前!!

竹田の後ろに控える他のファンクラブ構成員も頷いているし、これは本格的に遺書を用意するべきかもしれない。

「…そうか。ならば手短かに済ませよう。」

とりあえず、笠音からどこまで聞いた？」

「え？ えーと…確かこの世界がアイデアって名前で、この世界は俺達が住んでいる世界の構造を変えられる だっけ？」

と問い掛けると、笠音は頷きながら付け足す。

「それとアイデアの力の発動条件についても説明したわ。」

「…そうか。ならあと話すべきは能力について、それと敵についてだな？」

「敵って、例の負の感情が具現化されたっていう化け物だろ？」

その話ならもう聞いたぞ？」

「…その話は追って話そう。色々ややこしい事情があるからな。」

「？」

今までサクサク会話を進めてきたノゾキが一瞬詰まった。

……ということは、実はあの化け物以外にもいるのか……？ 襲ってくる奴が。

既に目の前に襲い掛かってきそうな奴が4人もいるのに？

生きて帰れるかスゲエ不安だ…。

「……話を始めるが、いいか？」

「あ、ああ。」

能力。

その定義をノゾキは丁寧に説明し始めた。

この世界のアイデアという名前は、俺が命名したものだ。
アイデア本来の意味は知ってるな？

その定義通り、ここには全てのモノの「本質」が存在している。
そしてそれは、逆の意味をも表すことが出来る。

即ち、「ここに存在するもの全てが『本質』を体現させている」と
よって、この世界に降り立った俺達も、俺達自身の「本質」を体現
させているのだ。

そんな自覚はない？

無いだろうな。

何故なら「本質」は俺達自身なのだから。

つまり、本質になったところで自身の体に変化は起きないはずなの
だ。

普通ならな。

お前、自分に才能があると思うか？

…「何だよ、藪から棒に」って顔をしてるな。

安心しろ。これも説明の一部だ。

まず断言するが、全ての人間にはある部分で特化した才能が存在す
る。

もし才能が無いという人間がいたなら、それはその才能が開花する
フィールドに遭遇してないだけなのだよ。

何故そう断言出来るか？

それは、人を人たらしめるDNAが才能を持つことを強要している
からだ。

DNAは生物を繁栄させるための本能を生物自身に与え、そしてそ
の本能はあらゆる環境において生命を持続させるために才能を持た

せる。

あらゆる環境に対応するために、そうやって出来た才能は人それぞれなモノとなる。

「走るのが速い」、「絵が上手い」のような簡単に言い表わせられる物から、「金に關しての処理スピードが速い」などの限定的な才能も存在する。

そして

アイデアと呼ばれる完全なる世界において、自身の「本質」が体现された時のみ、「超能力」という「才能」が開花する

そういう人もいる。

それが俺と笠音だ。俺の場合は、「他人の思考を読み取る能力」が、笠音の場合は、「アイデア内の大氣中に存在する五大元素を集め、核として精製する能力」が備わった。

以上が、能力の説明だ。

「……………つーことは、能力は才能によって起こる、つてことでいいんだな？」

「ああ。その解釈で構わない。」なるほど…才能か。

つまり、ひよつとしたら俺も能力が使えるようになるかもしれないつてことか…。

すると、今の俺の思考を読み取ったのであろうノゾキは首肯した。

「無論だ。そして…俺の背後で今にもお前に掴み掛かっている…竹村だったか？」

「竹田だッ！！ 自己紹介終わってまだ数分しかたってねえだろ！！！」

叫ぶ竹田。

「……む、済まない済まない。」

そういつて少しおどけたようなポーズをとるノゾキ。

こ……コイツ、謝罪に誠意が微塵も籠もってねえ……！！

まあ竹田だからいいけど。

「……話を戻そう。竹田でも能力を発現する可能性は十分にある……というよりは、本来はここには能力を持つ者しか来れないはずなのだよ。」

「そうなのか？」

「ああ。そもそもここに来るためには自身のESUを使用して黄金比のゲートを開く必要があるからな。」

ESU？黄金比のゲート？

「おっと……まだESUについて説明していなかったか。」

ESUというのは、能力者が自身の能力を発動する上で周囲に展開する、力の範囲のことだ。そもそも、今俺や笠音が使っている能力は、本来の能力のほんの一部分に過ぎない。本気を出すと自身の魂の本質が変容した『精髓機構』と呼ばれる装甲が現れ、自分の鎧となるのだ。そして、その鎧の発動する範囲内で俺達は能力を使う。」

「それがいわゆるESU Energy of Soul Unitの稼働範囲つてわけ。ESUは私の命名なのよ……！」

突然話割って入ってきた笠音が胸を張る。

……はは……やっぱお前の命名か。

「それで？『黄金比のゲート』つてのは何なんだ？」

北川が話を促す。

「お前達が来るとき、なにか四角いものを通ってきたはずだ。たしか……窓だったか？」

「ああ、昇降口の窓だったぜ。」

そう答えるのは田中だ。

「その窓は恐らく縦と横の比率が黄金比になっているはずだ。」

「……なんで断言できるんだ？」

そう俺が尋ねると、今度は笠音が答えた。

「この世界の入り口となるゲートは必ず四角いものに表れるの。それも、縦と横の比が黄金比になっている四角いもの限定でね。」

すると、ノゾキはくいつとメガネを押し上げると、俺に向かってこう問い掛けてきた。

「黄金比の長方形が万人にとって最も美しいと感じる四角形である理由を知っているか？」

「？」

「それは その黄金比が理想郷たるアイデアへと通じているからだ。」

「厨二、乙!!」

思わず俺はツツコンだ。

「しかし中々にこの説はバカに出来ない。最も美しい比率と最も美しい世界…その関係を何の議論もせずに否定することは出来ないしな。」

「……さいですか……。」

「……さて、もう全部話しただろうし、最後に敵について説明

」

刹那。

周囲がまばゆい閃光で見えなくなり、そしてノゾキの声を完全に掻き消す爆発が起きた。

「……」

窓から外を見ると、すぐ隣のビルから黒々とした煙が上がっている。

「……噂をすればなんとやら、ね……。」

「まあ、説明の手間が省けた、ととらえておくか……。」

二人はごく冷静に立ち上がると、体に光をたたえながら、静かに唱

える。

『奮え、我が魂よ。』

『……………。』

訂正。唱えたのは笠音だけだった。

こんな時にも遺憾なく厨二を発揮できるのはある意味凄いと思う。

光が収まると……………さっきまでの姿とはまるで違う二人がいた。

笠音は身体中に重火器を搭載した、高さ約三メートル程の機械を身に纏っていた。

機体は主に赤い配色で、人型に近い。

そして、その機械のてっぺんから上半身だけを出している。

まるでI・Sのようだ。

ノゾキも同じようにI・Sモドキに乗っていた。

こちらは笠音のように重火器を搭載してはおらず、非常にスリムな青色のボディをしている。

ただ、笠音のそれと大幅に異なる点があった。

まず、上半身が露出されていない。

首から下は完全に機械の中であり、その頭には巨大なフルフェイスヘルメットのようなものをかぶっている。

……………これが、精髓機構…？

「行くぞ。」

「今から敵を叩きつぶすから、とくと見てなさい！！」

そう言い残すと、ノゾキと笠音は大会議室の窓を叩き割って外へと派手に飛び出ていった。

命題5：精髓機構起動力 E S U （後書き）

疲れたあ……

命題5、設定情報を大量に書き込みました……

毎度読みづらい文章で申し訳ありません……OTL

昨日の報告には、今日は更新しないと書き込みましたが、書いちゃいましたw

とりあえず、ここからまた物語は動き出します。

命題6ではバトルがメイン。

動きのあるアクションシーンが書けるよう、頑張ります!!

ではまた、お会いしましょう!

命題6：その記憶は錯誤か回帰か

もうもうと黒い煙をあげるビル。

その煙の中にたたずむ一人の人影をノゾキは見つけた。

「……何者だ。もし過失や誤解で襲撃してきたのなら、俺達はそちらに危害を加えない。弁明するのは今のうちだぞ。」

しかし、その人影は答えない。

「……聞こえているか？ 俺達は今なら見過ごしてやる、そう言っているんだ。」

すると。

能力を操る他に、自身の力を増強し、その視覚や聴覚、嗅覚を鋭くする装甲 精髓機構によつて強化されたノゾキの目は、僅かにその人影の肩が震えているのを捕えた。

決して、怯えて震えているのではないことがわかる。

笑っている。

状況は2対1。

いや、相手が既に仁科たちのことも察知している可能性もある。

しかし、仮に察知していたとして、仁科達が能力を持たない存在であることを知るすべは無い。

つまり、場合によつては7対1であるかもしれないのに、敵は不敵に笑っている。

その不気味さと不快な雰囲気、ノゾキは眉を寄せた。

「何がおかしい。」

「気でも狂つてるんじゃない？」

即座にそう返した笠音は、既に臨戦体制に入っていた。

身体中の重火器を人影に向け、その手には笠音の身長ほどもあるうかという超長距離狙撃銃が鈍い金属質の光沢をたたえている。

それでも煙の中の人影は答えない。

ただ、その影を煙のなかに不気味に揺らめかせるだけだ。

そして、黒い煙が薄れていき、人影の姿が明らかになるかならないかの瀬戸際で、ようやく人影は動きだした。

「……背面の鎧を展開。貫け、『ロンギヌスの槍』。」

そう唱えた直後、その人影の背後から幾千もの槍が現れ、その刃が笠音、ノゾキに襲い掛かる。

「!!!」

突如現れた幾千もの槍に圧倒される笠音。

人影は狙っていたのだ。

自身の正体がわかるかわからないかの瀬戸際、その正体を知ろうとして一瞬気をとられる、その瞬間を。

「チツ!!! 私をナメんじやないわよ!!!」

笠音は手に持つ超長距離狙撃銃を構えると、思い切り引き金を引くと、

ズドオオ…ツ!!!

という轟音と共に超長距離狙撃銃から大砲弾ほどのエネルギーの塊が大量の槍の群に飛んでいき

飛んできた槍全てを撒き散らす大爆発を引き起こした。

「すげえ…アレが、能力…!?!」

「みたい…だな。」

興奮したように叫ぶ竹田に、冷静に答える北川。

しかし、冷静とはいっても、やはり微妙に興奮を隠しきれないでいるらしく、その足はせわしなく貧乏ゆすりをしていた。

「すっげえ〜…なんかSFかアニメみたいだな。」

「かつけーな!!!」

田中と橋岡も会話に参加し、興奮した様子で笠音達を応援している。

……しかし、俺はそんな空気に馴染めないでいた。

何故かはわからない。

普段の俺なら、この非日常な光景にテンションMAXになってもおかしくはないのに。

それなのに…笠音達の戦う音が、爆発音が、空気を槍が貫く音が、俺の鼓膜を震わせるたびに俺の不安を増大させていく。

今、目の前で戦っているのが、己の力をぶつけ合い、互いに傷付けあっているのが、人の命で、生きた魂で、そして一方は俺達を砂漠から救い出した恩人であることをまざまざと思い出させる。

そして。

爆発音と同時に吹き荒れる暴風が、今までに無いほどまきあがったとき…それは、いきなり起こった。

「!!!!!!」

突然、自分の心臓が跳ね上がる。

猛烈な吐き気と、思わず片側の膝を付かせるほどの目眩が俺を襲う。

目の前で竹田が死んでいた。

北川も田中も橋岡も皆

そして、ノゾキも笠音も例外なく、そこで己の血を流し、その亡骸を横たわらせている。

それだけじゃない。

竹田達だけじゃない。

無数の人人ひとひとヒト

その屍が山となつて、まるで廃棄物のような扱いで積み上げられている。

中には体の一部分が無いものもいた。

首があらぬ方向に曲がつている者もいた。

共通していたのは…誰もが死んでいることだけ。そんな、とても現実とは思えない残酷な光景が、唐突に俺の脳裏に映し出された。

なんだよ……今の…！？

今のは、今の光景は…！？

そして、俺は本能的に察知した。

死ぬ……ここにいたら……

ここにいたら皆死ぬ　！！

逃げないと逃げないと逃げないと逃げないと逃げないと逃げ

「　い？　おい　？」

逃げないと逃げないと……

「おい！！　仁科！！　どうしたんだ！？」「！！！！！」

竹田が耳元で叫ぶ声で、現実に取り戻された。

まだ胸の拍動は激しく、息は上がっていた。

「どうしたんだよ…。突然倒れたと思つたら、いきなり窒息して…。」

「

……逃げないと……。」

「は？」

「ここを逃げないと、俺達みんなやられちゃうぞ！！　ここは危険だ！！！」

「何バカなこと言ってんだよ？　あの侵入者ならノゾキさんが戦つてるし、今のところ戦局はこっちが有利な展開だし、危険な要素な

「なんてどこにも」

「伏兵がない保証がどこにあるんだよー!!」
自分で言っつて、ハツとした。

伏兵……そうだ……伏兵がこのビル内に潜んでいて……そして……
戦いが始まってから丁度今くらいのタイミングで俺たちの後ろに
!!

とっさに振り返る。

そして、次の瞬間

大会議室の大きな観音開きのドアが、全て吹き飛んだ。

命題7：罪と悦楽の境界に

「ふふっ……あなた達、人の忠告は受けるものよお……？」

ドアが吹き飛び、大量の埃があがる中、その埃を一切気にする素振りもなくソイツは現れた。

その女は笠音達が来ている、あのどこか近代的な鎧と同じような鎧を来ていた。

ボデイは赤黒い。その赤黒さに金や銀が装飾されたソイツの鎧は……きれいというよりも、むしろおびただしい血の色を思わせる。

「だ……誰だ……？」

俺は身構えて問うた。

「私い……？ あなた自身がさつき答えを言ったでしょう？」

「……伏兵……だと……！？……アンタ……何処から現れた！？」
確かに、このビル内に隠れることの出来る部屋は大量にある。

さつき伏兵が存在する可能性を思わず叫んだのは、そのためだ。

しかしよく考えてみれば、本来、ノゾキの目をかいくぐってこの建物に侵入するのは難しい。

何故ならノゾキはその能力で半径数十メートルの人間の敵意とESUを常に監視していたはずなのだから。

その監視があつたからこそ、先程の襲撃にも落ち着いて対処し、現在はその襲撃者と交戦しているのだ。

そして、ノゾキは交戦している今でさえ いや、今だからこそ敵意とESTの監視を続けている。

即ち、先程の襲撃に紛れてこのビル内に侵入すれば、ノゾキは気付いてここに来るはずなのだ。

しかし、ノゾキに気付いた様子は無い。

未だ先程の襲撃者と交戦中だ。

「さぞかし不思議に思っているでしょうねえ……」

俺は身構えるのを止めない。

「でもね」

女は続ける。

「伏兵の存在がバレていたら伏兵の意味が無いでしょう……?」

そっぴいなながら、女の右手の人差し指が僅かに動くのに、俺は気付いた。

「!」

俺はとつさに後ろに飛び跳ねた。

女が僅かに右手を動かしながら、口をにたあ……と歪ませる。

「そう……いい反応ですわ……。これまで殺してきたヒトの中でも中々にいい素材の『本質』が得られそうですわあ……。」

「本質……?」

俺の後ろで竹田がそう呟いたが、俺にとってはそんなことよりももっと重要で、最も喰い付かなきゃならない場所をさらに問う。

「人を殺した、だと……?」

「ええ、殺しましたわ。それが何か?」

「……!」

思わず戦慄する。

今この女はなんて言った?

『何か?』って言うてきたのか!?

人殺しを何とも思っていないって言うのか……!?

「な……何か?」じゃ、ねえだろ……?!」

「何を問の抜けた顔をしているのです? この世界では切った貼った、殺った殺られたは日常茶飯事ですよ? それなのに何を今更

ああ、そういう事ですか……。」

女は一人得心したように頷き、俺達を値踏みするようにこちらを無遠慮に見渡してくる。

「何を一人で納得している…!!！」

「ふふっ…質問ばかりですのねえ！ 『あれは何？これは何？』とまるで子供のようにですわ!!！」

そして女は再び笑う。

それを見た者の怒りを一気に沸点まで上昇させるほどの嘲笑。

いや、それは嘲るといふより、虫けらを哀れみつつもしかし絶対的優位を背にそれをもてあそぶような…

…すでに自身と同じ種であるはずの人間に向ける表情ではなかった。

「テメエ…!!！」

誰より早く沸点に達したのは、北川だった。

怒りの余り、俺を突き飛ばすような勢いで俺を押し退け、女の前に立ちほだかり、身構える。

「ひひっ…まあまあ、落ち着きなさい、新人りちゃん。今からじっくりと、たっぷりと、私の目的とこの戦いについて教えてあげ…る…」

そして、こう付け足す。

「あなたを実験台にしてねえ!!！」

女はそう叫ぶが早い、先程から僅かに動かしていた右手を正拳突きのように突き出すと、その右手が光りだし、瞬く間に巨大な槍を呼び出した。

そして。

そこからは一瞬だった。

その時何が起こったのか、俺には視認出来なかったのだ。

ただ俺の目の前にいた北川の姿が忽然と消えたかと思うと、俺の真横を何かがとてつもない速さで通り抜け、会議室の奥の壁へと「ベチャアツ」という音を立ててぶつかつた。

誰も、何も言えない。

数秒間の沈黙が場を支配する。

その沈黙を破つたのは、竹田だつた。

「き…北…川!？」

振り向くと

「な…あ…!!!??」

先程何かが叩きつけられた壁には、一目では何か判別不能な肉塊が転がっていた。

その肉塊は……

北川は

全身を何か巨大な杭のような物で何度も貫かれたかのように穴だらけで

首から先が、なかつた。

「あ……ああ……き……北川アアアアツ!!!?」

「ヒヤアアアッハハハハア！！！！　これだからやっぱり止められないわねえ、人殺しはア！！！」

北川の惨憺な姿を見て、俺は…震えながら、この所業をしでかしゃがった女へと振り返る。

「何を……した……？」

ナンデコノオンナハワラツテルンダ？

ドウシテワラツテイラレルンダ？

ドウシテ、ドウシテ……？

ドウシテコンナコト……？

女は槍を構えていた。

その槍の先に、北川の首から上がある。

槍の刃を真っ赤に染め、それ自身も真っ赤な液体で染められている

……

真っ赤な中でポカンとした表情のまま絶命している北川の顔が…

やめろ……やめてくれ

こんなのは夢だ……！！

悪い夢なんだ……！！

誰かそう言ってくれ！！

この夢から叩き起こしてくれよ！！

その心の叫びも虚しく、女の声は確かな現実感を持って俺の耳に響き渡る。

命題8：自己犠牲の果て

一面の赤の世界の中、女は満面の笑みを浮かべている。
しかしそれは、狂気にまみれた笑みだ。

「ふひひっ……誰も出てこないのなら、私が選んじやいますね……」

一歩一歩と女は俺達の方へと近づき、その女と一定の距離を保つように俺たちは後退し
いつしか俺達は部屋の壁……そう、北川の身体の残骸のある場所へと追い詰められた。

「皮肉ですわねえ……」

あなた方が逃げるにつれて、あなた方は自身の未来の姿たるその肉塊へと近づくことになる……。」

「ちっ……！！」

そう舌打ちしたのは田中だ。

「このままじゃ……俺達も殺られるぞ！！」

そんなことは、この場にいる全員がわかっていた。

ただ、どうすればいいのか全くわからない。

少しでも動けば、あの巨大な槍が自分を貫くことが目に見えていた。
だから、動けない。

かといって、このままやられるわけにもいかない。

まさに絶対絶命だった。

そんな状況を打開したのは、意外な奴だった。

橋岡。

この中で最も台詞が少なく、存在感の無い彼が突然こう言い出したのだ。

「この状況で助かるには、俺達の手だけじゃ無理だ……。とすれば、助かるにはノゾキさんや笠音サマを連れてくるしかねえ。」

「でも、多分ノゾキさんはこっちの様子に気付いてないぞ。どうするんだよ？」

竹田のその問いに、橋岡は答えた。

「二手に別れて外に逃げる。俺と田中は右手から、竹田と仁科は左手から行ってくれ。どちらか一方でもこの建物から出られれば、俺達が生き残れる確率は高まるはずだ。」

俺達は意外さを全面に押し出した顔で橋岡を見た。

「……なんだよ？」

「いや、お前のこと空気と思ってたけど、やるときはやるんだな。て。」

「なんだよそれ……。」

「かなり危なさそうな手だけど、それしかねえか……」

「……そうだな……。」

確かにこの一手しか、俺達の今の状況を打開する策は無い……。

「……北川……。絶対に、お前の死は無駄にはしない……!!」

「このアイデアってさ……世界の本质を変えられるんだろ？ なら北川を生き返らせる事だ……!!」

「……ああ。絶対に生きて帰るぞ……!!」

『おっ……!!』

橋岡の台詞に応えた俺達は狂気の女の左右へと別れて突っ込んでいく。

思えば、これが最後だったのだ。
俺がこのファンクラブ構成員と団結出来たのは…。

「チツ……………!!」

ノゾキ達は苦戦を強いられていた。
未だ敵の正体を掴むことすら出来ていなかった……………いや、それどころかその姿すら拝めていない。

敵は自身の姿が見えそうになるたびに、地面を攻撃してその姿を砂嵐に隠すのだ。

そのため、今どこにいて、どんな状態で、どこからどんな攻撃をしてくるのかがいまいち分からない。

そして、さらにノゾキに解せないことは、敵の感情がまるで感じ取れないことだった。

「コイツはなんだ…？ ロボットの一種か？」

「確かにロボットには感情が無いから、あなたの能力の範疇を超えているだろうけど……………いくらアイデアでもここまで高性能なロボットは居ないわよ…。」

「……………確かに、な……………」

感情が読み取れず、その姿さえ見えない……………そんな気味の悪い状況でも、この二人は落ち着いていた。

が、落ち着いてどうにかなる物でもないことを、二人は十分わかってもいた。

「ここいらで勝負に出るぞ、笠音!!」

「ええ、さつさと終わらせて戻らないと、アイツらに嘗められるしね!!」

二人は今の全力を各々の能力へと加える。

そして、砂塵が薄くなり、敵の影が見えた一瞬の内に　その全力を放った。

「轟禍の炎弾>ライジングフレーム・バレット<!!」

「……………」

二人のどちらが技名を叫んだのか、最早説明の必要は無いだらう。

ノゾキはそのスマートなボディの鎧の何処に隠していたのかわからない、長大なレーザー砲　BRAVER352　を構えると、一気に引き金を引き、その先端から放たれた高周波の閃光を迷うことな　く敵の影にぶちまけた。

そしてさらに追い討ちをかけるように笠音の持つ超長距離狙撃銃から爆炎が起ると、その巨大な反動で笠音の身体はわずかに後退した。

そして、音さえ歪ませるほどの光線と、その巨大な反動を引き起こした灼熱の弾丸は、先程の砂塵の中に浮かび上がった影に確かに命中した　はずだった。

しかし。

「…………チツ……………」

ノゾキは静かに、しかし苛立ちを隠すこともなく舌打ちをした。

「逃げられた、わね……………」

その舌打ちのわけを淡々と、しかしやはり悔しげに、笠音は呟いた。

あの集中放火の直前、先程対峙していたはずのESUの反応が消え

たのに、二人はすぐに気付いたのだ。
そしてそれと同時に、気付く。

『はめられた　　！！』

目の前から消えたESUと同じ反応が、別の場所に現れたのだ。
その場所とは、他でもない　　大会議室。

「アイツらが危ない！！　　すぐに戻るぞ！！」

「クツ……！！　　本命は私達ではなく、能力不明な仁科達ってわけ
……！！」

「おそらく敵の目的は、イデア内の意志を持った『本質』の殲滅
……！！」

「自分の望みを叶えるのに邪魔な存在を消して、意のままにイデア
を操ろうって魂胆……！！」

その卑劣なやり口には覚えがあった。
「字耶ゆま……！！」

その名前を口にして、笠音とノゾキは大会議室へと舞い戻った。

しかし、ノゾキ達が異変に気付いたのは少しばかり遅すぎた。

ノゾキ達が大会議室に戻る、ほんの数分前

俺達は左右に別れて女へと突撃した。

狙いは大破した出口のドア。

そこから出られれば、俺達が生き残る確率は高まる。

そして、北川を生き返らせられる確率も　　高まるはずだった。

始め、女は俺達の意外な行動に目を見開いた。

が、それもつかの間、彼女は不敵に、不気味に微笑み、唱えた。

「背面の鎧を回収 至れ、『ロンギヌスの槍』」

「が……ッ!!」

女の詠唱の直後、俺と竹田の目の前の床に無数の槍が突き立てられた。

突き立てられた槍はまるで牢獄の格子のように目の前に立ちはだかり、行く手を阻む。

しかし、それは俺達にとっては好機でもあった。

俺と竹田へと槍を繰り出したために、その反対側の橋岡達への対応がおろそかになっていたので。

女の横をすり抜け、そして遂に田中と橋岡は大会議室の外へと逃げ出すことに成功した。

「やった……!!」

「走れ、橋岡!!」

カ一杯、俺と竹田は叫んだ。

取り残された俺達には、もうそれくらいしか出来ることは無い。

他にあるとすれば、この場を凌いで生き残ることだろうが それは難しそうだった。

だから目一杯、俺と竹田は女の注意を自分たちに向けることにした。

「オラ、こいよ……!! 北川の恨みを晴らしてやる!!」

「お前なんか好きにさせちゃたまんねえんだよ!!」

それは俺の人生最大の虚勢だった。

虚しいかもしれない。だが、俺達は叫んだ。

本当に最期の望みになるかもしれない橋岡達に全てを託し、己の全霊を掛けた。

それなのに

まだ、その女は笑っていた。

まるで鬼ごっこをしている子供のような笑み。

「どこへでも逃げてごらん」と言わんばかりのその笑みは、やはり俺達を戦慄させる。

何かがマズい。

この状況すらまだ彼女の手のひらの上で、ただ俺達が彼女にもてあそばれている…そんな考えが頭に浮かぶ。

そして、そのいやな予感を肯定するように、彼女はさらなる詠唱をした。

「右腕の鎧を解放…貫け、『矛盾の戈』…左腕の鎧を解放…穿て、『三叉の槍』」

しかし、槍とは、直線的攻撃だ。

すでにドアを出て直線的な位置に居ない田中や橋岡への攻撃は不可能。

とすれば、あの槍は俺達への攻撃…。

そう俺は断定するとそれらの槍へ対抗するべく後ろへと下がった。

竹田も同様に後退する。

女は再びにたあ…と笑うと、こう言った。

「やはりいい反応をしますねえ…。新入りには戦い慣れているような…。もしそれが先天的な物なのであれば、ぜひその本質を奪いたいですわ…。是非…。」

どうやら、俺達の思惑どおりにことが進んでいるように思えた。アイツの注意は完全に俺に向いている。

これで橋岡達も安全にこのビルから脱出出来るはずだ……！！

そう思った次の矢先、

彼女はこう切り出した。

「でも、まずはさっきの脱走した人を殺さないと……」

「……」

彼女は両腕の鎧から現れた二本の槍の矛先を、俺達ではなく、大会議室のドア目がけて構える。

そして……

まず動いたのは三叉の槍。

三叉の槍の、そのフォークのように割れた先端があたかも触手のように動きだしたのだ。

あの槍……曲がるのか！？

さっきも言ったが、槍は直線的な武器だ。

つまり一直線上にしなければ攻撃されないはずの武器。

しかし、あの三叉の槍は……意志を持つかのごとくうねり、曲がっている。

つまり恐らくは、曲線的な軌道を描く攻撃が可能なのだ。

女はにやにやと笑い、最後にこう唱えた。

「殺りなさい、双槍。」

まず、矛盾の戈と呼ばれた槍の柄が突然長くなり、壁を貫通してその向こうにいる存在を貫いた。

「ッ……あ……アアアアアアッ！！！！ウガアアアアッガッ
アグバガウアヤアアアア！！！！！！！！！！」

何かをえぐるような音と、液体が飛沫をあげて飛び散る音。

そして、断末魔の声。

今の声は……

今の声は……！！

しかし、それだけでは終わらない。

今度は三叉の槍がうねり、その刃の部分を伸ばし、くねくねと曲がりながらドアを出て、廊下を駆ける。

廊下から「橋岡アアア！！」

という叫びの後、その叫び声の主の悲鳴が聞こえた。

絶望が俺と竹田を支配する。

肩から力が抜け、膝からがくりと地面に落ちる。

反則だろ……？

壁が無いかのように障害物を貫通する戈と、曲がり、目的へと刃を突き立てる槍……。

策は、もう無い。

あったとしても、もう何も考えられないし、実行する気も起きない。
田中の悲鳴はまだ続いている。

やめろ……

もう、嫌だ……

俺が女を覗むと、女はとてつもない悦楽を得たかのような、快樂に

浸ったような、そんな表情をして俺を見下げた。

さらに、失意に打ちのめされている俺達に追い討ちをかけるかのよう
うに、するすると貫通した壁から徐々に戻ってきた「矛盾の戈」の
先には 橋岡の血に染まった頭があった。

ヤメロ……ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤ

メロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロオオオオ!!!!!!!!!!!!!!

「アアアアアアアア!!!!!!!!!!

もう、やめるオオオオ!!!!!!!!!!」

わからない。

もう何が何だかわからなかった。

ただ溢れる絶望と怒りに身を任せた俺は絶叫して、女へと突っ込ん
でいった。

命題9：無と同等の片鱗

怒りを拳に込めて思い切り引くと、俺は女に殴りかかった。しかし、それを黙って見ている女じゃない。

彼女は田中へと繰り出していた三叉の槍を呼び戻すと、俺の方へと刃を向けた。

それでも俺は止まらない。

否、もう止まりたくない。

死ぬならさつさと死んでしまえばいい。

ただ、コイツの思い通りになるままに死ぬのだけは嫌だった。だから、俺はこの拳を止めない。

「畜生オオオオ!!」

俺が拳を突き出したのと、彼女の三叉の槍が蠢いたのはほぼ同時。

そこから先は　まるでスローモーションのように見えた。

三叉の槍先は一度ぐるりとネジ巻いたかと思うと、そのまま鋭く俺の心臓を的確に狙いを定めてくる。

しかし、俺には何故だかわかっていた。

槍先がどこに来て、どうやって避けるかも……!!

俺はダンスのターンのように回って女の背後に回り込んだ。

そのとつさの動きに、三叉の槍の追尾が僅かに遅れ…

その遅れを利用してこっちも的確に槍の来る位置と角度を測り……

そして、再び俺は女に拳を突き出した。

ガッ!!という音が会議室に響く。

女は今度こそ驚愕で言葉と笑みを失った。

しかし何より驚いたのは俺だ。

なんと、俺は三叉の槍の三つにわかれた先端の内の長いほうを、握り締めた拳の人差し指と中指の間で挟んで止めていたのだから。

「私の三叉を……止めた!？」

「……!!」

俺は今、何をした？

たった今の刹那の中で……

自分の意識の外で、俺はとんでもない事を考え、それも実行に移した気がする。

蠢く槍を握り拳の人差し指と中指で止める。

人差し指から血が出ているが、これは恐らく槍を止めた際に切ったからだろう。しかし、普通であればこんな怪我では済まない。

偶然、いや、もはや奇跡だ。

まともな神経ならやれない芸当だ。

「仁科……!!」

背後から聞こえた竹田の声でようやく我に返ると、俺は今の状況を確認する。

俺の右手で止められた三叉の槍は既に動きを止めていた。

どうやら三叉に別れている内の一本でも動きを止められると、他の二本も動きを封じられるらしい。

偶然開かれた、絶好のチャンス。

逃す手はない!!

「ハアアアアア!!!!」

俺は空いている左手を思い切り握り締めると、目の前の女との距離を一気に縮め、そして、握った拳を

叩き、込めなかった。

俺の体は痙攣を起こしたように振動し、一切の意志を受け付けなくなつた。

「な……ッ!？」

ぐらりと揺れる視界。

倒れる中で右手を見ると、握った槍からスパークが出ていた。

(この槍、電気も出せるのか　!!)

膝を付く。

埃まみれの床に顔が近づく。

そして、そのまま痺れて倒れこんだ俺の意識は、深い闇の中へと落ちていった。

○○○○○○○○

「仁科ア!!!!」

倒れこむかつての級友、そして今は善きターゲットである仁科を見て、竹田は叫んだ。

「結局みんな……死んじゃうのかよ……!!」

正確には、仁科は死んではない。

しかし、それが現実となるのも時間の問題だった。

そしてその現実が訪れるのは、何も仁科だけではない。

竹田とて例外では無いのだ。

女 字那ゆま は、まさにその現実を実現させるべく竹田へと歩みを進め、ついに手に持った槍を竹田の首筋に触れさせた。

「ひっ……!!」

「動かないでくださいねえ……。動けば刺します。動かなければ、このまま殺してあげます。ですから安心してください……。あなたもすぐに仲間のもとへ行けますから、ね」

その一切安心出来ない台詞は、竹田の逃げる意志を奪うのに充分だった。

動けない。

動けば、殺される。

しかし、動かなくても殺される。

死から逃れるすべなどもう無かった。

そこでは、ただ処刑を待つ時間と恐怖しか存在を許されない。

竹田は短すぎる人生に幕を下ろされる覚悟を決め、静かに目を閉じた。

「いいですわ……。往生際はやはり、ある程度良くないと。」

そして、女は、ゆまはやはり不気味な笑みを浮かべて槍を今付き立てんと振りかぶり、……………。

一瞬だった。

ゆまの手から槍が吹き飛ばされた。

「……………あ……………?」

悦楽を奪われ、唾然とする女。

「誰ですのお……？ 私のオ……大事な大事な殺戮タイムを邪魔してくれたのはあ……？」

僅かに怒りの表情を含んだ視線ぶつけた先には、窓。

そして、その窓には銃痕があり、その銃痕を確認できた瞬間。

窓を割ってノゾキ達が派手に乱入してきた。

「竹田！！田中！！北川！！橋岡！！」

「仁科！！」

各々が助けた少年たちの名を叫びながら。

しかし、そこには倒れたままの仁科と、恐怖に怯えながら首から血を流す竹田と、首から上だけで槍に刺さった北川と橋岡がいた。それは助けたはずの命が奪われた凄惨な現場だった。

「字那ゆまア……！！！」

状況をすぐに判断した笠音もまた、髪を逆立たせるほどに怒り狂っていた。

「貴様……無関係で無力な人間にまで手を出すか……！！」
ノゾキもまた、その怒りを隠さない。

すると、先ほどの怒りを落ち着かせた字那は……

「無関係？無力う？ふっははははっ！！」

また笑いだした。

「何がおかしいっていうの……！！」

「ハッ！！可笑しいにもほどがありますわ……！！この世界にいなながら、戦いに無関係な奴なんか存在しません！！この世界に存在するだけで、この世界の本質を動かす力の片鱗を担っているのですよ？たとえそいつの力が微弱で、無いに等しかったとしても！！この世界は等しく他者から影響を受ける……！！」

それに何？ 無力ですって？ 無力なのは私のせいじゃないわ。全ては弱い奴の責任！！ 弱いくせにこの世界に来たその身勝手さが悪いのであって、それで私を非難するだなんて、ちゃんちゃら可笑しいですわ！！」

「そ・れ・に」と字那は付け足す。

「弱い奴が強者たるこの私に殺されることに何の不自然さがありますの？ これは必然！！ 当然の報いと運命なのですわ！！」

もうその目は笠音を見ていない。

奢りと欺瞞と独善に支配された目に映る景色は、彼女の理想しか映さない。

「アンタ……！！ いいわ……。ここで会ったが百年目、アンタを潰す！！」

笠音はそんな字那へと己の力の矛先を向ける。

「……うるさい方ですわねえ……。今は私、戦いたくありませんの。誰かさんが私の余興を邪魔してくれたおかげでね！！」

そして、倒れたまま気を失っている仁科を掴むと

「 というわけで、私は帰りますわ。 この人間は手土産に貰っていきます。

では、ごきげんよう。」

と言って自信の鎧に能力を込めはじめた。

「待ちなさい！！ まだ話も決着も終わってないわよ！！」
そう言いながら笠音は字那へと突撃する。

が、突如字那の周囲から爆炎があがり
爆炎が収まったころには、その姿はすでに無くなっていた。

怒りのぶつけどころを失った笠音が壁を殴り、その壁を吹き飛ばす。
そして

「アアアア………！！
アアアアアア！！！」

その怒気をはらんで慟哭する声だけが、ボロボロとなったビル内に
こだました。

命題10：悲壮な紆余曲折（前書き）

3日ぶりの投稿です！！

にしても、命題10……長い……。

実は、私の中では命題10はあと二倍の分量がありました。が、全部やっていると何時までも投稿出来ない……。

ので、半分に分けることにしました。

残り半分は命題11に回したいと思います。

それではまたっ！！

命題10：悲壮な紆余曲折

目の前に、そーかがいた。

そして、すぐに気付く。

ああ、これは夢だ。

俺はさつきまでいたあの殺戮の世界とは似ても似つかない、広い公園にいた。

これは、確か五年前、小学校の時に行った遠足の光景だ。

「ねえ、蓮君……。」

そーかは気弱そうに呟く。

「ん？何？」

その隣で、まだ声変わりしていない、そしてエロゲはおるかギャルゲすら知らない俺が応える。

「私ね……。最近、夢を見るの……。」

「夢？」

「うん、夢……。蓮君が何かと戦ってて……傷付いて……泣いてる夢。」

「俺は泣かないぞ！」

あれ？

俺ってこの歳から一人称「俺」だったのか……？

ませてるな……俺。

そーかを見ると、慌てたようにこちらに顔を向け、耳元で必死な顔をして言う。

「あの、だから、夢なの！！ 蓮君も今よりずっとおっきくって、背も伸びてて……でも、泣いてたの……！！」

「わ、わかったから耳元で叫ぶなよっ！」

「あ、う、…ごめん。」

しょんぼりと顔を俯かせた幼なじみの顔を覗き込むと、なんとそこは泣いていた。

「え……え？」

そんなそーかの様子に戸惑いながら、俺はあたふたとするしか無かった。

「う……ん？」

何か昔の夢を見ていた気がする。目を開くと、そこには満天の夜空があった。

「目覚めたようですのねえ…。」

「!?!」

この声は……!!

とっさに起きようとしたが、体が動かない。

よく見ると腰や足に三叉の槍が絡み付いていた。

……便利な槍だ。とりあえず動く部分を駆使して、寝返りをうつとそこには思った通り、あの北川や田中や橋岡を殺した女がいた。

「テメエ……!!」

「テメエではありませんわ。もう私は伏兵ではありませんし、自己

紹介して差し上げても構いませんわね…。私は字那ゆま。この世界へ来て早2年のベテラン能力者ですわ。」

「何を呑気に自己紹介してんだ!!! お前、俺をどうする」
「そう叫んだ直後、顎を蹴られた。」

「ぐ……ッ。」

「自己紹介は大事ですわ。さあ、私は名乗りましたし、次はあなたの番ですことよ?」「……………」
「どうする。」

今のこの状況は完全にこの 字那ゆまにペースを取られてしまっている。

このまま黙っていればいずれ再び俺は顎を蹴られるだろうし……俺も、二発もの顎蹴りを平気で耐えられるほどの丈夫な体は生憎持ち合わせていない。

つまり……

選択の余地は無し、か…。

「…………俺は仁科 蓮だ。ここへは今日来た。そして、どっかの誰かのせいでダチを失った。」

皮肉を織り交ぜながら、渋々俺は答えた。

しかしそんな皮肉は全く意に介さず、字那は満足げに頷いている。

「うんうん、これで自己紹介も済みましたわね。さて、それでは本題に入りましょうか。」

「…………本題?」

「ええ。貴方は何か他の人間とは違った本質をお持ちのようですよ、ひよっとしたら強力な能力者へと覚醒するやもしれませんし……。ですので、貴方は特別扱いすることにいたしましたの。」

買い被りすぎだ。

俺が能力者?

さっきの槍を止めたことを言っているのなら、まるで検討違いだ。

俺自身、どうしてあれを止められたのかまるで分からないが、恐らくあれはただの偶然だ。

しかしまあ、それをあえて伝えることもないか。何せ正直に伝えれば俺も殺されちまう。

ここはハツタリをかけて少しでも生き長らえて、俺の出来ることをやるしかないだろう。

そう冷静に判断した俺は、

「そいつはどうも。出来れば北川達も特別扱いしてほしかったんだがな…。」

と半眼で皮肉を精一杯こめて答えた。

しかし、字那は悪びれもせずそれに答える。

「北川？ ああ、あの殿方ですか。ダメですわあ…あの方は私の槍を素手でお止めになれませんでしたもの…。」

やっぱり、槍を止めたことで誤解したのか…。

「それに比べて貴方は素晴らしいですわ。この三叉の槍の刃を素手で止めるなんて、常人は愚か、能力者ですらありえないこと。貴方はよほどの才能を秘めているに違いありませんわ。」

「世辞はいい。それで、本題つてのは何なんだ？」

「率直に申しますと、私と組みませんか？」

はあ？

あれだけ残酷なことをしておきながら、俺を仲間にするつもりなのか、コイツは？

「率直に言う。断る。」

すると、字那は意外そうな顔をした。
いや、当然だろ？

目の前でクラスメートを殺した奴と組むだなんて正気の沙汰じゃない。
い。

「…そう。もしこの話を呑んで頂けたなら、貴方を同盟者として迎え入れ、その槍を解いて差し上げようかと思いましたが…。」

「あんな、分かってねえみたいだから教えてやる。

大魔王の『世界を半分くれてやる』は『いいえ』コマンド安定なんだよ!!! 『はい』にしたとたんバッドエンド確定なものも分かんねえのか!?!」

はっ!!!

超危険人物相手に俺は何を語ってるんだ!!!

しかし字那は全く訳が分からないというように小首を傾げている。
どうやら、怒ってはいないようだ。

「大魔王? コマンド…? 能力の一種ですの…?」

てんで勘違いな方向に思考が進んでいるが、訂正する義理など俺にはない。

だから、

「いや、何でもない。こつちの話だ。」
と話を誤魔化した。

しかしどうもこの行為が悪かった。

字那を見やると、どうやら字那の中では

「大魔王」=能力の一種

の等式が完全に成立してしまっただらしく、期待に満ちた眼差しを俺

に向けてきていた。
…めんどくさ…。

「どうしても私の同盟者になりませんこと…？ 貴方ならば共に最強を名乗れるほどの能力者になれると思いましたが…。」

「なる気はない。」

思い切り断言してやった。

今までの怒りを込め、ゲームを一切知らないらしいその無知さへの怒りも若干込めていうと、字那は俯いた。

「………ですか。しかしまあ、それでは殺すしか」

「俺はそれでも構わない。」

「………。」

字那の言葉を断ち切るように言うと、字那は黙りこくった。さっきからの言動から察するに、どうやら字那は余程俺が欲しいらしい。

俺の挑発とも取れる発言はことごとくスルーだし、しかも同盟の話も断つても殺すことなく再び提案してくるのだ。

つまり、ここでゴネればゴネるほど、時間は稼げる。

そう考えた俺は徹底的にゴネさせて貰うことにした。

しかし。

「………そうですか。では、世間話でもしましょうか。」

「は？」

なにやら字那は妙な方向から俺を説得しようとし始めた。

「私はこの世界に来てから、元の世界へは帰ったことがあります…。ですから、ここに来て以来まともに会話した事すらないのですよ。なにせ、私と会う人は皆、逃げるか攻撃してきましたから…。」

ですから、攻撃も逃走もしない方とお話出来るのは久方ぶりですね。」

「攻撃も逃走も出来ないように槍でがんじがらめに縛ってるのは誰だよ。」

それに……

「……そりゃあ、あんな殺戮をする奴と話し合ったりするなんて」

「……違うのです。」

字那は俺の声を遮り、俯きながらそう言った。

「違う……って……？」

「私だって、最初は好き好んで人殺しなんかしませんでした。」

でも、私の意志とは関係なく、人々は争い、殺しあっています。……この世界の覇権を巡って。」

「……。」

不思議な話じゃない。

確かに、こんな世界だ。

ヒトの欲望を炙り出すには、ここは絶好の場所。

そして、欲望を剥き出しにした人間は、他者を顧みない。

恐らく字那がこの世界に来たばかりの時は、そんな血なまぐさい場所だったのだろう。」

「でも今は、争いなんて全く起こって無いじゃないか。こんなに平和なら、あんな風に人を、俺のクラスメートを殺さなくなったら」

「平和……ですか。」

静かに、陰鬱な声で再び俺のセリフを遮ると、こちらを暗い眼差しで見つめてきた。

「……何か違うのか？」

「いえ、見方によっては平和なのでしょうね…。」
でも、と字那は続ける。

「争う人間そのものが、私と 詩乃とノゾキしかない状況で、平和と果たして呼んでもいいものでしょうか…。」

「な…。」

「この世界には幾人もの能力者がいました。しかし、その全ては詩乃とノゾキと私の手によって死んでいるのですよ…。」
先週まではまだ5人程いましたが、つい先日全員殺しましたの、私
が。」

「……待て…!! どういうことだよ!? 幾人もいた能力者を、お前だけじゃなくて、笠音も殺していたのか!？」

「…話せば長くなりますし、かいつまんで申しませうか…。」

ほんの二年前。

このアイデアでは、様々な能力者がしのぎを削り、己の欲望の為に争いあっていた。

そこに立ち上がったのが、笠音だった。

彼女は何かしらの方法によってアイデアの性質を突き止め、その発動には全員の意志を統一するだけでよく、争う必要がないことを数々の能力者に伝え回った。

……しかし、その話に耳を傾けたのはノゾキだけだった。

そんな中。

ある少女がアイデアへと迷い込んだ。

それが、字那ゆまだった。

笠音に助けられた彼女はいつしか笠音やノゾキと共に行動し、そして数数の能力者を説得し、聞かないものは倒してでも無理やり説得し、そして願いを叶えるべくアイデアの能力を発動させるのにあと一歩、という段階へ至った。

しかし。

そこで事件は起こった。

笠音の願いは

「殺された妹を助きたい」
という物だった。

そして、字那の願いは

「人殺しの冤罪を被せられた父を助きたい」
という物だった。

普通、親族 特に親が罪を犯した場合、その子供を両親のどちらかの旧姓に戻すことがしばしばある。

字那も例外ではなかった。

字那ゆまの元の名前は、矢井場ゆま。

父親は矢井場譲。

それを聞いたとたん、笠音が怒りだしたのだ。

何が因果か 字那ゆまの父親は笠音の妹の仇だったのである。

それ以来、この二人は絶縁し、笠音・ノゾキのグループから外れた字那は一人、厳しい砂漠の世界で生きることとなった。

「それ以来、私と笠音は会えば殺しあいばかりしていましたわ。そしてそのうち…人とは怖いもので、お互い、人を殺すことにも慣れてしまいましたの。もっとも、私の場合はそこに快樂を見出だしてしまうのですけれど… それは、また今度お話いたしますわ。それでグループから仲間外れにされてしまった私に構うものなどありませんでした。いえ、それどころか殺そうとする者さえ居ましたわ…恐らく詩乃の回し者でしょうけど。だから私は私なりの戦いを始めましたの。」

「…そんな事があったのか…。でも、その話には一つ不自然なことがあるぞ。笠音は決して他人に汚れ仕事を押しつける性格じゃない。それどころか自分から突っ走っていく性格だ。それを伝えようと口を開くが、先に字那が喋りだす。「だから私は、私なりの戦いを始めましたの。」

「あの事件の後、私達の不和を見た能力者達がまた争いだしましたの。だから、笠音達はまた説得 というよりは征服でしょうか。をしに、アイデア中の能力者の元へ行くようになりましたわ。そこ…で…。」

字那はそこで一旦息継ぎをした。その顔を見ると、あの、北川を殺した時と同じ顔…悦にいった顔を

していた。

「……………!!」

「笠音達が去った後の能力者はズタボロでしたわ……。まだ当時、微弱な能力しか持っていなかった私でも容易に殺せる程に。」

「……………そうやって力を蓄えつつ、能力者を…殺していったのか。」

「ええ。そして私は気付きましたの。なにも意志を統一するなんて面倒なことをする必要など無いと。」

「奪ってしまえばいいのですわ…!! その者の本質ごと、その意志を!!」

「…それが『本質を奪う』ってことか。」

確か字那は俺と初めて対峙したとき、いい本質がうんたら………と言っていたが、そういう話だったのか…。

「その通りですわ。私は死体…いえ、死にゆく体とした方が正しいでしょうか…からその存在の本質を取出し、意のままにすることが出来るのを発見しましてね…。そして、その本質を集めることで、イデアの力の一部を発動することが出来るようになりましたの。」

「……………こんな風に。」

字那は静かに右手をあげる。

と、そこで地響きが起こり…一瞬の後には……

「……………ここは!?!」

あたり一面が熱帯雨林と化していた。

「あなた方も似たようなことをしていたでしょう？
あなた方はビル。そして、今、私はジャングルをイメージいたしま
したの。」

「俺の意志も存在するのに、どうして…!？」

笠音が言うには、誰かの意志が混ざるとイデアは上手く働かないは
ずじゃあ…

「貴方の意志を相殺出来るだけの本質を私が手に入れているから。」

「つまり…それだけの人を…」

「殺しましたわ。」

あっさりと言った。

かつてはひ弱だった少女をここまで変えさせた世界。
その中で、少女はただ眩く。

「……どうしてこうなってしまったのでしょうかね……。」

命題 11：耐えて、堪えて、絶えて

仁科が捕まった。

あの猟奇的な少女に攫われたとなれば、生きている保証などどこにもない。

しかし、笠音は使命感の炎を絶やす事はない。

ノゾキもまた、己の責任感を吹き消すことはなかった。

自分が救った命が、自分たちの過失によって失われてしまった。そして、残った命もまた、危険に曝されている。

迷いは無かった。ましてや議論の必要など一切いらなかった。

ただ、助けるために少年と少女は準備を着々とすすめていく。

「……………田中……………」

先程の襲撃が終わってすぐに、竹田は襲われた田中の元へと急いだ。北川に橋岡 よき仲間だった二人は確実に死んでしまった…。だが、田中だけは確認出来ていない。

僅かな希望を胸に、田中の叫び声が聞こえた場所へと行くと

全身から血を流し、息も絶え絶えだが、しかし、まだ生きている田中がいた。

それから数分の後、笠音とノゾキによる応急手当をし、田中はの容態ある程度安定した。

しかし

「……この状態もいつまで持つか分からないわ。早急にアイデアの力を使うしか、回復する見込みは無いわね……。」

「……確かにな。」

そこで竹田ははっとしたように笠音に質問した。

「そっだ、北川達は……！！北川達もアイデアの力で助けられるんだよな！？」

「……………それは……………」

……………夜が更けてきた。

きれいな満月が夜空に上り、俺はただそれを見つめる。しかし、別に俺は名月に趣を感じているわけではない。

「……………動けねえ……………」

相変わらず俺は槍で固定されたままだった。

地面にはそこらの木の葉っぱを積んでいるから痛くはないが、首の角度からしてこのまま寝たら寝違えるのは確定事項だろう。

「すう……………」

隣から呑気な寝息をたてているのは字那だ。

この状況なら楽に脱出出来るのではないか……と思った俺が愚かだった。

まず槍で全く動けないし、しかもモゾモゾすればするほど槍の締め

付けが悪化する仕様だったのだ。

その結果、俺はあり得ない体勢で寝ることを余儀なくされた。それでこれだよ……。

動けはしないし腰は痛えし首は妙な方向を向いちまってるし……正直自分が明日まで生きていくかすら怪しい。

……嘆いても仕方ない。

アイツになぶり殺されるよりはマシなはずだ。

そう考えて俺は寝ることにした、のだが。

「！？」

俺の体がコマ回しのよう一回転して、ぬかるんだ地面をゴロゴロと転がった。

見ると、槍から解放されている。

「うっ……！？」

今まさに寝ようとしていた俺は情けなくもその体勢で転がって近くにあった木にぶつかり、呻いた。

「……なんて……なんだよいきなり……。」

見上げると、さっきまで隣でのどかに寝息を立てていた少女……字那は立ち上がり、その手に先程まで俺を拘束していた三叉の槍を持っている。

「……もう来ましたの……。」

字那が対峙していたのは

うりざね顔に、角張ったフレームのメガネ。
外見は知的に思わせつつも、実際のところはただただいい加減な少年。

「『いい加減』はないだろ、『いい加減』は。」

バツチリ俺の思考を読みつつ不平をあらわにしたノゾキだった。

数分前。

ノゾキと笠音は、崩壊しかけたビルの大会議室で作戦を練っていた。竹田は隣の部屋で絶対安静の田中を見ている。

「……アイツ、いつの間に仲間なんて用意していたのかしら……？」

当時の状況を整理すると、このビルを襲ったのは二人いた。共に槍使いであり、同じ技を使い、同種のESUを纏っていた。そのためノゾキの探知能力ではその二人の人物を同一の存在と勘違いし、大会議室の伏兵、すなわち字那の侵入を探知出来なかったというのだ。

「状況だけを見れば、あたかも字那が分身したみたいだけど……字那にはそんな能力無かったはず……。」

「……笠音。最初に字那が言っていたセリフ、覚えているか？」

「…え？ ええと…本質がどうのって話？」

「違う。それよりも前だ。
アイツはこう言った。」

『背面の鎧を展開』

とな。」

「…アンタは、あの私たちが戦っていたのが本物の字那だって言いたいのか？」

「それは否、だな。」

俺たちが戦っていたのはあくまで囷だ。だが、最初は字那本人だったんだ。」

「…どういうこと？」

「これはあくまで仮説だが、多分最も真実に近い。」

…恐らく字那は鎧を分解して、且つそれらの鎧をリモートコントロールすることが可能だ。」

「…私たちの相手をしていたのは単なるアイツの鎧の一部だったってこと…！？」

「…ああ。最初の『背面の鎧を展開』というのは背面に着けた鎧を分解して、自動律式のロボットのようにするためのシグナルコード。絶えず砂ぼこりを発生させていたのは、戦っているのが字那本人ではないことを見破られ、本人が伏兵として侵入していることを知られないようにするためだ。」

当然、この手ならば両者から発生するESSUは同種のものとなる。」

もとは字那の一部だからな。

そして、ESUはそもそも能力の鎧を起動させるためのエネルギー。つまり鎧のいる場所を中心に広がっていく。

これによって、俺はまさに字那の居場所を鎧がある場所と勘違いしたんだ。」

「そして自分はこのうのと侵入して、残りの鎧を起動させて、竹田や仁科を襲った。」

「……ああ、だから感情が読めないときに気付くべきだったんだ。無論、鎧には感情などない。あの時ロボットと言った線はあながち間違っていなかったんだ……。」

「そして、私たちが背面の鎧に全力で攻撃したタイミングで、鎧を回収した……。」

「だから突然ESUが消え、別の場所に移動したかのように錯覚したんだ。」

移動したのではなく、もともとそこに居ただけだったのに……。」

「……その自動律式の鎧に対して、なにか対策はある？」

「ある。結局のところ、この鎧は罠や伏兵、陽動作戦としてしか作用しない。」

つまり、それぞれのものが強力というわけではなく、奇襲にしか使えないのだ。

だから。」

「。」

「そついうことだ。」

作戦は立て終えた。

あとは、仁科を助けに行くだけだ。

しかし、ノゾキはずっとあることを気にしているようだった。

「……………本当にアレでよかったのか？」

隣の部屋を見ながら、笠音に尋ねた。

同じく隣の部屋　竹田と田中がいるその部屋を見つつ、笠音は淡々と言った。

「……………ええ。下手なことを言って期待を持たせるより、酷でも真実を告げたほうがよっぽどマシだから……………」

「……………」

「体を本質化するこの世界で死んだ人間は、決して生き返らない。

その死体もある程度時間が経過すると消え去ってしまう。

それどころか、この世界で死ぬということは、その本質が死ぬということ。

つまり……………」

竹田に告げられた真実。

「この世界で死んだ人間は、元の世界では『存在すらしなかった』ということになる。これだけはイデアでさえも覆せない事実よ……………」

命題 11：耐えて、堪えて、絶えて（後書き）

北川と橋岡の冥福を祈ります。

黙祷……（チーン）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4279z/>

最果ての理想論

2011年12月29日14時51分発行